

# 本学図書館(第一期)の部分的分析

榎原孝行

## はじめに

大学と創立を同じくする図書館は、昭和40年4月～48年3月をもって第一期を終えたと考える。その理由の主たるものは、学長兼務館長の退陣で、付加的に新図書館への移転の期待がある。

学長兼務館長の退陣は図書館に質的な大変化をもたらした。意図された大学と図書館のポリシーの一致は、創立間もない時期では図書館に不利益のおよぶはずのものだからである。

新図書館へは実際には49年3月に移転するが、8年間の「室」での図書館活動は殆ど限界的状況になっていたといえる。新図書館への期待は強く大きかった。48年度はそこへの移転準備期間と解される。

以下はこの第一期の部分的な分析私見である。

## I 分析の対象

### A 経費

- a 大学総経費と図書館費
- b 人件費：資料費：その他
- c 学生1人当りの資料費
- d 館員1人当りの資料費
- e 図書館費と受入冊数
- f 資料費の配分率と他の図書購入費

### B 資料

- a 蔵書冊数
- b 蔵書構成および和洋比
- c 増加冊数
- d 集書方針
- e 図書以外の資料

### C 奉仕

- a 登録率・貸出率・利用率

- b 貸出利用者数の推移
- c 入館者数と閲覧冊数
- d 蔵書回転率と分類別利用比率との関連

他にD 施設・設備, E 職員, F 運営・管理などもあるが, 今はA～Cに留める。

## II 分析の基準

Standards には次の如きものがある。(便宜上, S 1, S 2……と区別する。)

- S 1. 大学図書館改善要項 (昭和27)
- S 2. 国立大学図書館改善要項 (昭和27)
- S 3. 私立大学図書館改善要項 (昭和31)
- S 4. 公立大学図書館改善要項 (昭和36)
- S 5. 私立短期大学図書館改善要項 (昭和36)
- S 6. 私立大学図書館運営要項 (昭和38)
- S 7. 大学図書館施設計画要項 (昭和44)
- S 8. 台湾の大学図書館基準 (1964)<sup>1)</sup>
- S 9. アメリカ大学図書館基準 (1959)<sup>2)</sup>
- S10. アメリカ短期大学図書館基準 (1960)<sup>3)</sup>
- S11. イギリスの Recommended Summary Standards of Library Provision in Colleges of Technology and other Establishments of Further Education (1964)<sup>4)</sup>

このなかから準拠したいものは, S 6, S 7 (S 7に項目のない場合はS 2を代用), S 9が主で, その理由は比較的新しいものであり, 内容に先進性を持つがためである。概して基準とは最低線を示すものであるが, これらは指標を形づくっているところがある。そこに小図書館の現実とは格差を生じることもあるので, それを埋めるものとしてところどころに類似の大学の平均値と対比する方法をも採ってみた。(類似の大学は単科大学であり女子大学である6校を選んだ。大学名は伏せる。)

## III 分析の実際

### A 経 費

#### a 大学総経費と図書館費

S 6は図書館費(人件費を含む)は大学総経費の8～10%。S 2には大学総経費の少なくとも10%を目標とする経常費と臨時的な特殊経費をもってし……とある。S 9では教育的ならびに一般的予算総額の最低5%とする。概観的に standards においては十年ほど前に5%前後の線, 現在では10%前後にその線が定着しつつあるといえよう。

第1表での図書館費÷大学総経費は平均9.9%で, およそ standards の10%ラインに乗って

第1表<sup>5)</sup>

	大学総経費 (A)	図書館費 (B)				B A (%)
		人件費	資料費	物件費	計	
昭40	36,343	—	10,675	350		
41	56,615	—	11,444	815		
42	84,056	—	10,018	951		
43	110,344	—	6,726	2,402		
44	161,566	3,611	9,917	2,196	15,724	9.7
45	165,304	4,408	12,408	2,270	19,086	11.5
46	205,929	5,826	11,632	2,439	19,897	9.7
47	263,727	7,765	11,888	3,352	23,005	8.7

(単位は千円)

(注) 物件費には製本費ならびに図書館建設積立金を含む。(後者は43年度より)  
なお、人件費は図書館費のなかでなく法人費より支出されている。

ると判断される。しかし大学総経費の伸びは46年度を100とした場合、47年度は128、48年度は209となるため、今後10%はかなり割れていくと見られる。(類似大学との対比資料はなし。)

b 人件費：資料費：その他

第2表

	人件費	資料費	その他	計 (%)
昭44	23.0	63.0	14.0	100
45	23.1	65.0	11.9	100
46	29.3	58.5	12.2	100
47	33.8	51.6	14.6	100

S6では図書館費中の人件費は50~60%、資料費は40~50%、維持費は10%とする。S2では、人件費と物件費は均等の比率とする。S9には、よい大学図書館は通常、図書費の二倍(ないしはそれ以上)の額を給与に費している、としている。

第1表から図書館費の割合を求めると第2表の如くなる。

創設まもない図書館の常として、資料費の占める率の高いことはかなりのものである。おそらく第1年次へとさかのぼるにつれて、この率は高くなるに違いない。反対に人件費の低率は第1

第3表

	%
A 大学	40.2
B "	27.8
C "	40.9
D "	44.9
E "	47.2
F "	41.8

第4表

	大学別	人件費	資料費	その他 (%)
昭40	国立	25.7	63.7	10.6
46	"	29.0	57.0	14.0
昭40	私立	30.8	61.7	7.5
46	"	34.5	56.0	9.5
昭40	計	28.3	62.5	9.2
46	"	31.6	56.6	11.8

(計には公立を含む)

年次ほどひどく、徐々に率を高めていく。その他(物件費)が常に10%をオーバーしている理由は図書館建設積立金約100万円を含んでいるせいである。少ない図書館費の中からのこの支出は学長兼務館長のひとつのポリシーであった。

類似大学の46年度の人件費率は第3表の通り。

「日本の図書館」<sup>6)</sup>による数字を第4表とする。この推移からうかがえることは人件費とその

他の漸増、資料費の漸減である。おそらく人件費はこれ以降急増的傾向を示すであろうが、資料費はその他の漸増との関連もあり、次第に減少化を早めていくのではなからうか。しかし人件費をはるかに上まわる資料費の減少はさほど気にすることはあるまい。むしろ人件費の割合の低い原因の追求が望まれるところである。その他の内訳についての分析は今後の一課題であろう。

c 学生1人当りの資料費

第5表のなかで昭和41、42年度に高額であるのは英文学科の増設、教職課程の充実などの理由による。

第5表

	資料費 (千円)	学生数	1人当り (円)
昭40	10,675	321	33,255
41	11,444	618	18,518
42	10,018	953	10,512
43	6,726	1,386	4,853
44	9,917	1,555	6,377
45	12,408	1,635	7,589
46	11,632	1,803	6,451
47	11,888	1,846	6,440

第6表

	(円)
A大学	7,206
B "	4,051
C "	5,804
D "	6,763
E "	6,211
F "	8,013

この standards はない。大学図書館実態調査結果報告<sup>7)</sup> 昭和45年度分によると、国立では1人当り16,308円、公立で13,378円、私立では4,239円である。類似大学の45年度分は第6表の通り。

d 館員1人当りの資料費

これにも standards はない。(第7表参照。)大学図書館実態調査結果報告もこの数字は載せていない。しかしこれは図書館員にとっては見逃すことのできない数字である。資料費で購入す

第7表

	資料費 (千円)	館員数	1人当り (円)
昭40	10,675	5	2,135,000
41	11,444	5	2,288,800
42	10,018	5	2,003,600
43	6,726	5	1,345,200
44	9,917	6	1,652,800
45	12,408	6	2,068,000
46	12,237	6	2,039,500
47	12,522	7	1,788,900

第8表

	(円)
A大学	1,317,200
B "	879,300
C "	661,700
D "	963,800
E "	1,037,700
F "	1,213,800

る資料は整理されなくては利用できない。(従って正確には整理人教を挙げたいところだが——それは自館のみはできて他館は容易にわからない——止むを得ず全館員数で算定する)つまりこれは図書館の基本的作業量を決定する大きな要因のひとつである。類似大学の45年度分は第8表。

第9表

	図書費 (A)	受入冊数	購入冊数 (B)	A B
	(千円)			(円)
昭40	10,675	5,482	—	
41	11,444	2,606	—	
42	10,018	3,888	3,331	3,008
43	6,726	5,016	4,368	1,540
44	9,917	6,315	4,220	2,350
45	12,408	4,538	3,891	3,189
46	11,632	5,748	4,162	2,795
47	11,888	5,149	4,058	2,930

第表01

	購入冊数	図書費	単価
		(千円)	(円)
国立平均	16,013	44,396	2,772
公立 "	5,646	13,528	2,396
私立 "	5,528	12,712	2,299
本学 "	4,005	10,431	2,635

(注) 本学は昭42~47の平均。

A, B大学は、本学図書館と同じ40年4月開館、C大学は46年度末にて蔵書約10万冊、D大学は約6万冊、E大学は約8万冊、F大学は約15万冊の規模である。

e 図書費と受入冊数

本学図書館の第9表と大学図書館実態調査結果報告 昭和45年度分を比較すると第10表になる。国立の購入冊数は私立の2.9倍、図書費は3.5倍である。これは大学の施設・設備あるいは教員数などとも教育の不均衡——最近の流行語でいえば社会的不公正を物語る一例であろう。

f 資料費の配分率と他の図書購入費

本学図書館にはもともと明確な配分率はない。どんぶり勘定式である。特に創設時と第二年次においては、開設に備えて発注していたものが遅れて納入されてくる事態が主なもので、行き当たりばったりであった。42年度より予算面での配分の一応の線が出てくる。第11表がそれである。

第11表

	昭42	昭43	昭44	昭45	昭46	昭47
	(千円)					
研究費	1,000	1,155	1,260	480		
国文科	1,000	1,200	1,400	1,500	1,600	1,550
美学科	1,000	1,200	1,400	1,500	1,600	1,400
英文科	1,000	1,200	1,400	1,500	1,600	1,520
一般	1,034	1,235	1,463	2,403	2,374	2,651
他計	5,034	5,990	6,923	300	7,174	7,121
計の決算	5,019	5,985	5,877	6,901	6,956	7,112
特別	4,998			1,678	2,096	2,156
文部省研究設備		741	560	(研) 686	(研) 841	(研) 881
教育研究			3,480			
経常費補助				3,143	1,739	1,739
計	10,018	6,726	9,917	12,408	11,632	11,888

(注) 費目中の「特別」は開設時来の特別支出金。41年度はそれが8,416千円であり、40年度は8,875千円であった。45年度「特別」欄に(研)とあるのは研究費の支出元が二つに分れたことを指す。46年度の(研)はここで一本化。なお「一般」は一般教育と図書館との合算分を指す。

類似大学の配分率は資料がない。ただひとつ関東学院大学の例があるが<sup>9)</sup>、ここは図書費総額

のうちからその20%を図書館持分として控除したあとを各学部、あるいは部門へ次の算出によって配分する。

$$R = \frac{S}{10a} + \frac{F}{F_t} S$$

$$F = f_1 + f_2 + f_3$$

S : 図書費総額より図書館持分控除後の額

a : 学部, 部門教

F : 各学部, 各部門の係数

Ft : Fの合計

f<sub>1</sub> : 学科係数 = 各学部学科数 × 20

f<sub>2</sub> : 教員係数 = 各学部所属専任教員数 × 10

f<sub>3</sub> : 学生係数 = 各学部, 部門所属の学生数

この方法は各学部, 部門の平等が保たれるように見えるが, 各学部, 部門の特殊性が考慮に入っていないため, 実態は必ずしも平等でないという。(特殊性とは各学部の科目数, 各分野の図書資料の格差などを指す。)

配分率は基本的には各学科のカリキュラムが根になるべきと思われる。各科目についてどれほどの学習書・研究書が必要であるか, 担当教員の bibliography 作成がなされ, それが学科として総合されるところに費用のめどは生まれる。(この問題についてはB 資料で詳しく触れる。)その上でほかの大学の方法を参考として独自の配分率を決定すべきであろう。

他の図書購入費については, 図書の経常費補助金の枠が48年度以降も1,740千円であることを見逃さない。該補助金の年ごとの推移を把握して, 増額の要求をしても当然であろう。

## B 資料

### a 蔵書冊数

S 6では, 1学部当り(学生1,000名程度まで)文科系大学では5万冊, 理科系大学では3万冊とし, 1,000名を超えるごとに文科系2,000冊, 理科系1,000冊を加える, とある。S 2では在籍学生1,000名程度までは人文科学系で5万冊, 学生1,000名を超えるごとに人文科学系で1

第12表

	和書	洋書	計	学生 1人当り
昭40	8,854	3,183	12,037	37.5
41	11,442	6,077	17,519	28.3
42	13,734	6,391	20,215	21.1
43	16,690	7,323	24,013	17.3
44	20,241	8,788	29,029	18.7
45	25,418	9,927	35,344	21.6
46	28,929	10,953	39,882	22.1
47	33,323	12,307	45,630	24.7

万冊を加算する, とする。S 9では, 5万冊以下では教育指導計画に有効な支持を与えることが期待できない, としている。文科系大学では一応5万冊が最低基準となっているようである。本学図書館ではこの線に到達するまでに何年を費したか。第12表は蔵書冊数の推移である。

5万冊には48年度において達していること

が予想できると思う。つまり9年目で達成した5万冊であった。大学設置基準で示す最低図書冊数は本学の場合13,300冊であるから、これは初年度に購入済みとして、残る36,700冊を8年間で受入れたことになる。これが妥当であったか否かは別項の「増加冊数」で扱う。しかしここでいえることがひとつある。それは学生1人当り冊数の推移からである。5万冊に達するまでには普段の二倍程度の努力を傾注すべき(S6)と逐年増加にうたっているが、その努力が完全である

第13表

	冊
A 大学	26.7
B "	36.8
C "	63.5
D "	52.3
E "	37.0
F "	62.4

なら学生1人当り冊数が減少することはないはずである。少なくとも学生数の伸びは43年度までに飛躍的であるから、ここらまでの対応に万全であればおそらく5万冊の壁はかなり早く打ち破られたといえよう。

岩猿敏生氏の調査によると<sup>9)</sup>、1966年度の蔵書数は学生1人当り、国立で110.2冊、公立で76.7冊、私立で25.4冊とある。

類似大学の同年度の学生1人当り冊数は第13表の通り。

なお、雑誌の種類数も考慮すべきが妥当であろう。

第14表 四年生大学図書館蔵書の最低必要量の評価公式

	図 書		定期刊行物		ドキュメント	計
	タイトル数	冊数	タイトル数	冊数	冊数	冊数
基本蔵書：						
1. 学部学生図書館：	35,000	42,000	250	3,750	5,000	50,750
以下諸項に対する付加						
2. 教官数(専任)	50	60	1	15	25	100
3. 学生(大学院, 学部学生, 全日制)		10		1	1	12
4. 優等生特別課程, 独立学習課程の学部学生	10	12				12
5. 学部学生中心専門分野—「専攻」科目分野	200	240	3	45	50	335
6. 大学院学生中心専門分野—修士課程とそれに相当	2,000	2,400	10	150	500	3,050
7. 大学院学生中心専門分野—博士課程とそれに相当	15,000	18,000	100	1,500	5,000	24,500

(注) (1)50,750の冊数は、実際のリスト作成において経験より引出した権威ある蔵書の適切さを規定するものとして表示した。これらの重要なリストは下記のものであった。

リスト	年	タイトル数	
Shaw	1931	14,000—	(C. B. Shaw : A List of Books for College Libraries)
Lamont	1953	39,000—	(Catalogue of the Lamont Library, Harvard College)
Michigan	1964	56,550—	(University of Michigan Undergraduate Library, Shelf List)
California	1965	55,000—	(Univ. of California at San Diego, Library, List of Books Selected for the Libraries of Three New Campuses of the Univ. of California)

(2)2~4は1人当りの冊数。5~7は分野の数により算定する。

第15表 大学図書館の蔵書数算定公式

	図 書		定期刊行物		ドキュメント	計
	タイトル	冊数	タイトル	冊数	冊数	
(1)学部学生図書館	40,000	48,000	200	3,000	5,000	56,000
(2)教官	50	60	1	15	20	95
(3)学生(学部学生・大学院学生)		10		1	1	12
(4)専攻科目分野	200	240	2	30	50	320
(5)修士課程専門分野	2,000	2,400	6	90	500	2,990
(6)博士課程専門分野	10,000	12,000	60	900	1,000	13,900

付け加えると、蔵書冊数に新基準ともいうべきものを発表している二例がある。V. W. Clapp と R. T. Jordan の「大学図書館蔵書の数量的評価基準」<sup>10)</sup> と、黒木努氏の「大学図書館の蔵書教」<sup>11)</sup> である。Clapp と Jordan のもののなかに第14表がある。黒木努氏は Clapp らの表をアレンジして第15表を作成した。これらは共に6万冊を超える蔵書冊数を打ち出している。5万冊の線に留まるのはすでに遅滞というべきかもしれない。

b 蔵書構成および和洋比

第16表を見ていただきたい。

第16表

年度	分類	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	未分類	計
		総記	哲学 宗教	歴史 地誌	社会 科学	自然 科学	工学 家事	産業	芸術 運動	語学	文学		
昭40	和	624	452	1,094	487	616	172	27	995	443	2,532	1,412	8,854
	洋	166	205	97	426	74	10	2	135	432	788	848	3,183
	計	790	657	1,191	913	690	182	29	1,130	875	3,320	2,260	12,037
41	和	712	582	1,266	730	677	225	42	1,233	749	3,487	1,739	11,442
	洋	408	293	176	452	74	14	2	345	731	2,595	987	6,077
	計	1,120	875	1,442	1,182	751	239	44	1,578	1,480	6,082	2,726	17,519
42	和	931	833	1,427	1,431	806	261	50	1,564	966	5,465		13,734
	洋	1,057	338	191	574	74	14	2	471	775	2,895		6,391
	計	1,988	1,171	1,618	2,005	880	275	52	2,035	1,741	8,360		20,125
43	和	1,292	953	1,694	1,649	874	282	57	2,080	1,190	6,619		16,690
	洋	1,174	352	213	602	98	15	2	631	1,030	3,206		7,323
	計	2,466	1,305	1,907	2,251	972	297	59	2,711	2,220	9,825		24,013
44	和	1,510	1,052	1,889	1,901	1,094	396	86	2,971	1,330	8,012		20,241
	洋	1,237	405	239	683	121	15	2	794	1,193	4,099		8,788
	計	2,747	1,457	2,128	2,584	1,215	411	88	3,765	2,523	12,111		29,029
45	和	1,992	1,324	2,551	2,397	1,224	468	163	3,519	1,564	10,216		25,417
	洋	1,316	455	306	713	148	19	14	1,056	1,279	4,620		9,927
	計	3,008	1,779	2,857	3,110	1,372	487	177	4,575	2,843	14,836		35,344
46	和	2,302	1,595	2,814	2,702	1,324	573	196	4,285	1,689	11,449		28,929
	洋	1,365	501	327	743	168	23	14	1,267	1,419	5,126		10,953
	計	3,667	2,096	3,141	3,445	1,492	596	210	5,552	3,108	16,575		39,882
47	和	3,169	1,817	3,185	3,195	1,400	657	216	4,879	1,856	12,949		33,323
	洋	1,597	527	339	767	189	25	14	1,477	1,501	5,871		12,307
	計	4,766	2,344	3,524	3,962	1,589	682	230	6,356	3,357	18,820		45,630
		10.5%	5.1%	7.7%	8.7%	3.5%	1.5%	0.5%	13.9%	7.4%	41.2%		100%
	順位	③		⑤	④				②	⑥	①		

昭和47年度の分類別構成比を見ると、第1位は文学41.3%、第2位は芸術・運動で14.0%、第3位は総記で10.5%とある。第1、2位の細分は第17、18表の通り。



第17表

9 文 学				
綱	和	洋	計	%
900 文 学	1,073	1,142	2,215	11.8
910 日 本	9,825	33	9,858	52.4
920 中 国	663	1	664	3.5
930 英 米	1,034	3,865	4,899	26.0
940 ド イ ツ	81	213	294	
950 フ ラ ン ス	204	593	797	4.2
960 ス ベ イ ン	2	0	2	
970 イ タ リ ア	1	2	3	
980 ロ シ ア	50	8	58	
990 そ の 他	16	14	30	
合 計	12,949	5,871	18,820	

930英米の和洋比は21.1 : 78.9%

第18表

7 芸 術・運 動				
綱	和	洋	計	%
700 芸 術	2,130	774	2,904	45.7
710 彫 刻	123	32	155	
720 絵 画	1,198	225	1,423	22.4
730 版 画	26	6	32	
740 写 真	51	7	58	
750 工 芸	261	23	284	
760 音 楽	321	359	680	10.7
770 演 劇	316	49	365	
780 運 動	395	2	397	
790 娛 楽	58	0	58	
合 計	4,879	1,477	6,356	

第19表

910 日 本 文 学				
目	和	洋	計	%
910 日 本 文 学	1,927	2	1,929	19.6
911 詩 歌	2,638	8	2,646	26.8
912 戯 曲	51	2	53	
913 小 説	951	18	969	9.8
914 評 論	314	2	316	
915 日 記・紀 行	197	1	198	
916 ルポルタージュ	4	0	4	
917 諷刺・ユーモア	0	0	0	
918 作 品 集	3,700	0	3,700	37.5
919 日 本 漢 詩 文	43	0	43	
合 計	9,825	33	9,858	

第20表

930 英 米 文 学				
目	和	洋	計	%
930 英 米 文 学	617	1,604	2,221	45.3
931 詩 歌	50	508	558	11.4
932 戯 曲	72	453	525	10.7
933 小 説	72	521	593	12.1
934 評 論	38	100	138	
935 日 記・紀 行	4	127	131	
936 ルポルタージュ	1	1	2	
937 諷刺・ユーモア	7	14	21	
938 作 品 集	173	537	710	14.5
939	0	0	0	
合 計	1,034	3,865	4,899	

9類文学の第1位は日本文学で52.4%，第2位は英米文学で26.1%，第3位は文学総記の11.8%。第1，2位の細分は第19，20表の通り。

第21表

8 語 学				
目	和	洋	計	%
800 語 学	156	355	511	15.2
810 日 本 語	865	1	866	25.8
820 中 国 語	108	17	125	
830 英 語	497	638	1,135	33.8
∴	∴	∴	∴	
合 計	1,856	1,501	3,357	

昭和47年度現在では、本学の文学部は国文、美学・美術史、英文の三学科であった。つまり、以上に挙げた細分が一応三学科の蔵書を主に組入れた分類である。7類の芸術は美学・美術史学科用に、9類の文学は国文と英文の両学科用に分けられる。同様に、国文と英文の両学科に関連ある分類に8類の語学があり、その密接な部分のみを挙げると第21表の如くなる。

他に直接的に関連あるものとして、0類総記の080

叢書・全集に和書 1,434 冊，洋書 1,209 冊，計 2,643 冊がある。この和書は多く国文学科と結びつき、洋書は英文学科と殆ど結びつく。

蔵書構成についての standards はない。それは大学の教育目的と密接に関連する事柄であるから、普遍性より独自性を持つべきなのである。しかし、対比の必要性が全くないとはいきれない。大学図書館実態調査結果報告 昭和44年度分によると第22表の通りである。

この平均と第23表の本学図書館の47年度，他の二校のそれとを比較すると，やはり大学の独自性らしきものが出ていると思われる。その当否は何によって測られるのか。

その一方法を森耕一氏は述べている。<sup>14)</sup>蔵書構成の比率は，利用の比率に近いことが望ましいとする河井弘志氏の前提<sup>15)</sup>を万全としない立場から，蔵書回転率を利用する方法を氏は提唱する。

すなわち，第24表で概して両者マッチしている如く見える比率のなかで，第25表の全体の蔵書回転率4.65を上まわるものは5類の6.58，7類の5.03などが発見される。そして，5類の6.58から蔵書を何冊補充したらよいかとの設問には次の如く答える。

$$2,755 \div 4.65 = 592 \quad 592 - 419 = 173$$

分類	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	未分類	計	
	%												
第22表	国立	8.9	6.6	9.1	21.3	21.5	8.6	6.1	3.2	3.4	9.9	1.4	100
	公立	8.0	4.9	6.3	25.1	24.5	5.5	5.7	2.9	4.8	11.8	0.5	100
	私立	8.2	9.4	7.8	23.0	11.2	6.3	4.0	4.4	4.8	14.4	6.5	100
	平均	8.6	7.7	8.4	22.2	17.3	7.5	5.2	3.7	4.0	11.9	3.5	100
第23表	本学	10.5	5.1	7.7	8.7	3.5	1.5	0.5	13.9	7.4	41.2	0	100
	X大学	7.6	10.6	9.0	12.7	9.5	1.5	0.7	9.7	7.5	31.2	0	12)
	Y大学	19.1	11.6	16.7	26.0	1.6	1.4	2.9	2.4	5.1	13.2	0	13)
第24表	貸出	1.2	1.8	6.3	8.3	2.5	4.7	0.9	3.5	0.5	70.2		
	蔵書	1.9	2.1	8.4	7.9	2.9	3.4	1.1	3.2	0.6	68.6		
第25表	貸出	715	1,063	3,668	4,790	1,468	2,755	514	2,007	290	40,740		58,010
	蔵書	242	258	1,044	979	366	419	132	399	74	8,550		12,463
	回転率	2.95	4.12	3.51	4.89	4.01	6.58	3.89	5.03	3.92	4.76		4.65

第26表

	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
貸出	118	233	266	536	63	83	21	1,398	555	4,051	7,324
蔵書	4,766	2,344	3,524	3,962	1,589	682	230	6,356	3,357	18,820	45,630
禁帯出本	1,452	390	1,181	461	186	129	47	1,893	664	2,520	8,923
利用本	3,314	1,954	2,343	3,501	1,403	553	183	4,463	2,693	16,300	36,707
回転率	0.036	0.119	0.114	0.153	0.045	0.150	0.115	0.313	0.206	0.248	0.199

(注) 禁帯出本の数字は48年度末のものである。(47年度末には正確なものがなかった。) 従って利用可能本はこの表の数字よりいづらか増え，反対に回転率はいづらか減る結果になる。ご了解がいたい。

さて、この方法を本学図書館に応用することが可能であろうか。

第26表は47年度の数字であるが、まことに少ない貸出冊数である。全体で0.199、これを上回るものは7類の0.313、9類の0.248、8類の0.206のみである。館内閲覧は今はおいて、こと貸出に関しては残りの80.1%が眠っていることになる。応用も何もあったものではない。館内閲覧については後で触れる。

蔵書冊数の和洋比の問題は、そはが極端な場合図書館の学習および研究のどちらかへの偏向を一応意味づけるかもしれない。しかしその standards はない。

本学図書館の場合、47年度で和書73.1%、洋書26.9%の比である。洋書26.9%を上回るものは0類の66.5(和)：33.5(洋)、8類の55.3：44.7、9類の68.9：31.1である。0類の33.5%は主に080の叢書・全集である。8類の44.7%は800語学総記、830英語、840ドイツ語、850フランス語が主である。9類の31.1%は900文学総記、930英米文学、950フランス文学が主となる。

『日本の図書館 1972』によると、国立大学の和洋比は64.2：35.8、公立で64.4：35.6、私立で70.2：29.8、平均で66.7：33.3となる。

12) で引用した同志社女子大学図書館では、洋書率は全体で40.98%、これを超えるものとして7類の53.68%、8類の53.51%、9類の53.46%がある。

これらと比較すると、本学図書館の場合、まだ洋書率は低いといえる。

### C 増加冊数

(第27表参照)

第27表

	増加冊数	蔵書冊数	学生数	S6準拠冊数	必要図書費 (千円)	使用図書費 (千円)
昭40	5,482	12,037	321	1,926	31,717	10,675
41	2,606	17,519	618	3,708	9,770	11,444
42	3,888	20,125	953	5,718	15,066	10,018
43	5,016	24,013	1,386	8,316	21,912	6,726
44	6,315	29,029	1,555	9,330	24,584	9,917
45	4,538	35,344	1,635	9,810	25,849	12,408
46	5,748	39,882	1,803	10,818	28,505	11,632
47	5,149	45,630	1,846	11,076	29,185	11,888

S6の基準を再掲すると、逐年増加冊数は学生1人当たり2～3冊以上、最低基準に達していない場合(蔵書冊数が)は二倍程度の努力を傾注すべき、としている。S2は、累年増加冊数は学生1人当たり2冊以上。S9は、図書館集書の成長率は冊数が30万冊に達すれば緩むかもしれない、といいながらもその率は明示していない。

S6に準拠してその教を挙げると(第27表中)46年度末(41～46年度)で47,720冊、当初(40年度末)の蔵書冊数12,037冊(開設準備冊数13,300冊中の登録冊数)と合算すると59,757冊となって、最低の蔵書冊数5万冊の基準に達するのに2年の遅れがあったといえる。

それに要する経費に触れると、さきの購入平均単価を乗じるとして、第27表中の必要図書費となる。これは学生1人当りにすると、15,810円で、第10表の国立平均16,013円に近い数字となる。つまり、S6にいう逐年増加冊数を忠実に実行することで、漸く国立なみの数字になるというわけである。従ってS6で限定している「最低基準に達しない場合」という表現は削除されて然るべきで、これは購入平均単価が本学より低い場合はより強調すべきことと思われる。

更に経費でいえば、必要図書費と使用図書費との差は101,880千円である。この使用図書費はパーセントの判明している範囲で大学総経費の9.9%となって基準の10%に近いし、また資料費としての基準の40~50%を上まわる59.5%を示していながらなお1億円のマイナスなのである。

この事実からはさきの10%基準率そのものの不適當が指摘されるのではなからうか。平常的に図書費は20%を少し超える基準が望ましいと考えられる。とくに図書費の高騰した現在ではこの率でさえいわゆる社会的公正は保たれないのである。従ってこの面でも法人の一層の努力とともに同額に近い額の国庫補助が望まれることになる。

#### d 集書方針

これまでの本学図書館の集書方針は、学習と研究の二面をもつ大学図書館としての基本図書の充実であった。「その大学の特色ともなっている高度に特殊化された特殊資料群」<sup>16)</sup>はおろそかにはされたかったが、一応第二義的なものとされ、更に「良く利用される指定書、教養書といった一般的図書群」<sup>17)</sup>はあまり顧みられなかったとあっていいだろう。つまり、研究の面での集書の充実は期されていず、学習の面でのそれも半ばにあると判断される。

学習と研究の二面的集書を必要とする大学図書館で、その集書の standards に学生教のみを基本資料として算定している不合理性をつとに感じている人は多いであろう。学生教のみを基本としても、その教のみによって蔵書冊数が算定されることにも誤りがある。科目数などを考慮に入れていないからである。更に V. F. Massman と K. Patterson は次の如くいっているという。<sup>18)</sup>「学生教の多少にかかわらず、同一の学部乃至学科所属の学生が読むべき図書は当然同数であるべきであって、学生教が少ないという理由だけで、それが多し大学の学生よりは、人類の智的遺産を享受する権利が少ししか与えられないということが許されてよい道理はない。」

従って学生数以外にも集書をはかる要因はあるはずで、それはさきに蔵書冊数のところでの二例で少し触れた。つまり、教員数、カリキュラムと教授法、大学の地勢<sup>19)</sup>などである。教育と研究に従事する教員が、先ず研究上の集書をすべきは当然である。その後教育上の集書をカリキュラムに則って行なううえで、教授法とも関連して考えるわけである。また、他の大学が近接しているか否かは相互協力的性格を多分にもつ図書館としては重大な意味を持つ。

しかし、こういう要因に則って集書を考えるにしても、かかる量的な追求のみでよいとは考えられない。集書の質的な面の考慮が必要である。「蔵書はその数に基づいて優劣の判定をすることは、大学の学生数に基づいて評価するのと同様にばかげている。」<sup>20)</sup>「書庫にある図書の総数よりより重要なことは、図書の選択が教育的役割によって定義づけられている大学の要求を、どれ

だけ正確に反映しているかの度合にある。』<sup>21)</sup>すなわち、大学図書館の資料の適切さは、大学の教育計画の条件によって判定されなければならないのである。

普通、教育計画とはカリキュラムに単的に表現されるものであろう。各科のカリキュラム編成は大学の教育目的を追求する過程で成立すると見るのが妥当であろうから、カリキュラムこそは図書館の集書の根源を作るものであり、その蔵書構成は教育目的追求の結果である。

蔵書構成論なき資料選択論は結局盲目である<sup>22)</sup>といわれるが、その蔵書構成論はつまるところ全科のカリキュラム編成に結がることである。いかなる科目をたて、どんな教授法で臨むのか、それらが前年度のうちに確立準備され、担当教員のもとで bibliography が作成され、それらが図書館運営委員会なるもので検討整理されて、集書方針は決定される。かかる方法が採られてこそ集書の質なるものが始めて論議できるといえる。

e 図書以外の資料

主として視聴覚資料はまるでない。47年度末で第28表の通り。

第28表

0 総記	1 哲学・宗教	2 歴史・地誌	3 社会科学	4 自然科学	5 工業	6 産業	7 芸術・運動	8 語学	9 文学	計
1	0	1	1	3	1	0	7	2	1	17

視聴覚室の設備もない。LLの件で図書館の施設で考慮すべき要望が図書委員会に出されたことはあるが、現実では不可能である。将来の独立館の建設にまつほかはない。

マイクロ機器についてもほぼ同様といていい。

C 奉仕

第29表

	登録者数 学生数 = 登録率	貸出冊数	平均利用 冊数	貸出率	蔵書冊数	利用率
昭40	$\frac{279}{321} = 86.9$	1,928	6.9	6.0	12,037	16.0
41	$\frac{463}{618} = 74.9$	4,777	10.3	7.7	17,519	27.3
42	$\frac{743}{953} = 77.9$	6,515	8.8	6.8	20,215	32.2
43	$\frac{949}{1,386} = 68.4$	7,939	8.4	5.7	24,013	33.1
44	$\frac{1,030}{1,555} = 66.2$	6,606	6.4	4.2	29,029	22.8
45	$\frac{1,202}{1,635} = 73.5$	7,209	6.0	4.4	35,344	20.4
46	$\frac{1,385}{1,803} = 76.8$	5,892	4.3	3.3	39,882	14.8
47	$\frac{1,487}{1,846} = 80.5$	7,323	4.9	4.0	45,630	16.0
平均	75.6					22.8

(注) 平均利用冊数は貸出冊数÷登録者数。貸出率は貸出冊数÷学生数。利用率は貸出冊数÷蔵書冊数。

a 登録率・貸出率・利用率

登録率とは図書館の貸出登録者数を学生数で割ったものである。主として公共図書館界で地域社会との関連から重視される指標である。赤ん坊や高度の老年者がこの登録者に含まれないと同様に、本学図書館では18歳から22歳の学生の中にそれらに類する人々がいるらしい。(第29表参照。)

図書館利用のさまざまなデータに関する standards はない。対比の資料としては永田清一氏の使用したものを一部借用する。<sup>23)</sup>

第30表は単科大学の利用比率の一部である。その全体を比率ごとに区分したものが第31表である。

第30表

蔵書冊数	利用冊数	比率
18,689	12,835	68
63,284	7,552	11
21,204	4,556	21
16,907	4,813	28
38,065	12,900	33
13,077	20,474	156
45,091	46,124	100
12,135	18,884	155

(注) 私立大学図書館総覧本篇昭和35年版による。

第31表

比率	総合大学	単科大学	計
%	校	校	
10	10	7	17
20	4	3	7
30	6	4	10
40	4	1	5
50	3	4	7
60	3	2	5
70	2	5	7
80	1	1	2
90	2	3	5
100	1	2	3
101以上	4	12	16
計	40	44	84

第32表 (書籍読書率) 25)

	男	女	全体
	%		
16~19才	64.7	73.8	69.5
20代	61.3	59.6	60.3
30代	50.0	39.9	44.7
40代	47.7	32.8	40.4
50代	37.2	29.5	33.3
60才以上	30.0	13.9	22.5

第33表 (職業別(女子)読書人口比率) 26)

自営・給料生活者	59.6
家族従業者	21.8
主婦	35.8
学生	90.8

(注) 読書世論調査1964年版による。

第31表からうかがえることは10~50%の大学が84校中の半数以上の46校であること、なかんづく10~30%の大学数は全体の約40%であることである。本学図書館の場合は8年平均22.8%であるから最下位に近い20%代の7校に属することになる。

登録率は44年度を最低とする中だるみのカーブを描いている。しかし平均利用冊数では、41年度を頂点にして次第に下降線を辿っていることに注目すべきであろう。46年度において僅かに1人当たり4.3冊の貸出である。世界的に見て利用率の低い日本の公共図書館の平均で13冊<sup>24)</sup>である。スウェーデンは26冊という。学習と研究を主とする大学図書館にしてこの数字に満足すべきであろうか。

第34表 27)

	普通科		職業科	
	男	女	男	女
高校1年	2.6	3.0	1.4	2.5
2年	2.4	2.8	2.0	2.5
3年	1.8	2.2	2.1	2.7
平均	2.2	2.7	1.8	2.6

第35表 28)

	図婦 雑誌	
	%	
自分で買って読む	42.4	45.3
家にあるのを読む	22.9	22.1
人に借りて読む	15.4	17.9
公共図書館に行く	0.6	0.7
巡回文庫のを読む	1.3	—
学校図書館のを読む	4.4	1.6
職場図書館のを読む	6.0	2.9
貸本屋のを読む	6.5	8.4
その他	0.5	1.1

(注) 尼崎市1960。

第36表 29)

	男 女	
	%	
高校1年	18.0	27.8
2年	18.1	25.2
3年	15.3	21.8
平均	17.1	24.9

もともと若年の女子学生は男子学生、あるいは他の職業の人々と較べて読書比率は高い。第32、33表を見ていただきたい。16~19歳の女子の73.8%と20代のその59.6%、平均で66.7%という高率を示しながら、そしてまた、第32表で学生が90.8%であるにも拘らず、本学図書館の如き4.3冊なるデータがなぜ出てくるのか。高校生の1カ月の平均読書量は第34表の通りである。この平均の平均でいえば、1カ月2.3冊、年間では27.6冊となる。これはさきのスウェーデンとほぼ同数の読書量である。しかし、その図書の入手方法は第35表の通りである。自分のごく身近から本を得ている事実——図書が80.7%、雑誌が85.3%——は注目せざるを得ない。文化施設（無料の）からの入手率は図書で12.3%、雑誌で5.2%。貸本屋からのそれは文化施設より図書で約半分、雑誌では逆に3.2%高くなっている。第36表（学校図書館から借りた割合）の如きデータもある。男子の場合で、さきの1カ月平均読書量で算定すると、学校図書館から入手するのは4.1冊、女子の場合で4.6冊となる。これは本学図書館の4.3冊なる数字と酷似している。これから好意的に予想されることは本学学生もおそらく読書量の約20%のみを図書館に依存しているのではなからうか、ということである。

おおよその図書館は敬遠されているらしい。むしろ金を払っても貸本屋の方がいいという心情もあるらしい。何がいいのか。望む図書雑誌、とくに雑誌がそこにはあるらしく思える。この意味からすると大学図書館の敬遠される理由は肯けないでもない。魅力的な図書雑誌は何かという問題を考える必要が大いにあるようである。もちろん学習と研究との関連においてである。

第37表

	国 文	美 学	英 文	計	伸び率	学生数	伸び率
昭40	953	628	—	1,581	100	321	100
41	2,122	1,679	—	3,801	240	618	192
42	2,860	1,984	283	5,127	324	953	297
43	3,682	2,167	519	6,368	403	1,386	432
44	2,400	1,514	656	4,570	289	1,555	484
45	2,612	1,478	997	5,091	322	1,635	509
46	2,055	982	822	3,859	244	1,803	562
47	2,323	1,346	1,043	4,712	298	1,846	575

第38表

	1年	2年	3年	4年	計	前年度	1年の減少率	2年の減少率
昭40	1,581	—	—	—			100	
41	1,529	2,272	—	—			97	100
42	1,160	1,702	2,265	—			73	75
43	1,037	1,287	2,004	2,040			66	57
44	1,030	802	1,160	1,578	8,158		65	35
45	1,136	914	1,557	1,484	6,813	-1,345	72	40
46	922	753	1,022	1,162	5,091	-1,722	58	33
47	796	980	1,441	1,495	4,558	-533	50	43
					4,461	-97		

## b 貸出利用者数の推移

(第37表参照。) 貸出利用者数の伸び率は43年度をピークとして減小化を辿りながらの一進一退である。これは第38表の計の漸減からも指摘できる。その傾向はとくに1, 2年生に顕著であるといえよう。些少の例外はありながら、40年度を100とした場合の1年生の減少率は47年度で丁度半分である。2年生ではその速度ははるかに速く、46年度で約3分の1に落ちこんでいる。なぜこんな傾向を示すのか。社会状況、学生の質と指向の問題、教授陣の教授法を含めたさまざまな問題点、図書館の蔵書構成のあり方等等、今後十分に心しなければならぬ課題であろう。今後の参考のために更に細分した数字を掲げておく。第39表。

第39表

	国1	美1	英1	国2	美2	英2	国3	美3	英3	国4	美4	英4	計
昭40	953	628											1,581
41	796	733	—	1,326	946								3,801
42	558	319	283	946	756	—	1,356	909					5,127
43	400	318	319	703	384	200	1,185	819	—	1,394	646	—	6,368
44	473	293	264	326	275	201	602	367	191	999	579	—	4,570
45	547	383	206	396	237	231	902	369	286	771	439	274	5,091
46	586	181	155	406	236	111	469	354	199	534	211	357	3,859
47	492	204	100	426	316	238	757	384	300	648	442	405	4,712

## C 入館者数と閲覧冊数

第40～42表は47年10月23日から11月4日までの入館者数等の調査結果である。

第40表から平日はおよそ100人を僅かに超える入館者である、そして土曜日は平日の約3分の1、休日前は平日の80%ぐらいに減ることなどがわかる。大学図書館実態調査結果報告 昭和44年度分によると、私立大学の一日平均入館者数は105.1人。全大学平均では102.7人である。

科別の割合は国文を100とした場合、美学は88、英文は62となる。

学年別でみると、1年生を100とした場合、2年生144、3年生167、4年生147。

閲覧冊数は第43、44表の通り。閲覧冊数を入館者数で割ると第45表の如くなる。およそ1人の入館者は1.9冊の閲覧をしていることになる。(入館者が閲覧冊数を正確に記入したかどうかは疑わしい。最低の冊数と考えられる。)利用の分野は第1位が9類文学、第2位が7類芸術、



第40表

10/23	24	25	26	27	(土) 28	30	31	11/1	2	(土) 4	計
106	105	108	106	107	34	101	107	113	84	33	1,004人

第41表

国文 1	2	3	4	美学 1	2	3	4	英文 1	2	3	4	計
103	83	130	81	41	112	113	93	36	64	57	91	1,004人
397				359				248				1,004

第42表

1 年	2 年	3 年	4 年	計
180	259	300	265	1,004人

第43表

10/23	24	25	26	27	(土) 28	30	31	11/1	2	(土) 4	計
405	180	160	136	168	57	168	160	203	142	74	1,853冊

第44表

分 類	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
冊 数	205	41	55	65	17	17	11	445	288	709	1,853冊
比 率	11.1	2.2	3.0	3.5	0.9	0.9	0.6	24.0	15.5	38.3	100%

第45表

10/23	24	25	26	27	(土) 28	30	31	11/1	2	(土) 4	計
冊 3.8	1.7	1.5	1.3	1.6	1.7	1.7	1.5	1.8	1.7	2.2	1.9

第46表

分 類	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
閱 覧	11.1	2.2	3.0	3.5	0.9	0.9	0.6	24.0	15.5	38.3	100%
貸 出	1.6	3.3	3.7	7.3	0.8	1.1	0.3	19.1	7.6	55.2	100

第3位が8類語学、第4位が0類総記となる。同年度の貸出利用率とは第46表の如く異なる。

0類の閲覧比率が高いのは参考図書の利用のせいだろうか。3類社会科学の貸出比率が閲覧の二倍であるのは学習のためであろうか。7類の閲覧比率が貸出のそれより高いのは禁帯出本の美術書の利用のためだろうか。8類の場合は二倍以上の開きがあるがこれはおそらく語学書の寸読のせいだろう。9類の場合は貸出して読むべきなんらかの理由があるのだろう。

乱暴なことになるが、この数字で敢えて年間的な数字を概算すると次の如くなる。47年度の開館日数は239日なので、入館者数は21,749人、閲覧冊数は40,247冊。この数字からする蔵書回転率は0.882。——やはり前途は道遠しである。

d 蔵書回転率と分類別利用率との関連

第26表でこの項の根本データは出しておいたが、それを再掲して少し付加する。(第47表。)付加したものは閲覧比率を年間的に拡大概算したものと、それとの蔵書回転率である。僅か11日間の239日に拡大することは正確性に大いに欠けるが——従って今後は時期を選んでの年3回以上の入館調査が必要になると思われるが——大学図書館が依拠しなければならぬ利用統計は入館者数と閲覧冊数である。貸出のみの統計に頼っての分析は全体的なものとはいえないからである。

第47表で1以上の回転率を示したものは6類、7類と8類、平均的なものは0類と9類、他は語るに足りない。

「日本の図書館」所載の数字から類似大学の貸出に対する蔵書回転率を第48表として挙げてみる。

第47表

	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
貸出	118	232	266	536	63	83	21	1,398	555	4,051	7,323
蔵書	4,766	2,344	3,524	3,962	1,589	682	230	6,356	3,357	18,820	45,630
回転率	0.025	0.039	0.075	0.135	0.040	0.122	0.091	0.220	0.165	0.215	0.160
閲覧	4,445	884	1,195	1,410	359	359	239	9,679	6,262	15,415	40,247
回転率	0.933	0.377	0.339	0.356	0.226	0.526	1.039	1,523	1,865	0.819	0.882

第48表

大学	A	B	C	D	E	F
昭40	—	—	—	0.156	0.434	0.196
41	0.015	—	—	0.134	—	0.224
42	0.106	0.144	—	—	—	0.262
43	0.080	0.116	—	0.083	0.405	0.266
44	0.121	0.252	—	0.098	0.356	0.242
45	0.155	0.207	—	0.095	—	0.165
46	0.110	0.151	0.219	0.087	0.402	0.184
47	0.123	0.112	0.301	0.088	0.467	0.196
平均	0.116	0.164	—	0.106	0.413	0.217

(注) 平均でA大学の41年度は除く。

## あとがき

以上の充分とはいえない、そして舌たらずの分析のなかで、殆どすべての面で足りないづくしの感を覚える。何よりも数をと先ずいいたくなる現状である。

藤田豊氏はいっている。<sup>30)</sup>「私の身边、周辺の中小大学、短大図書館の現実、その制度、組織、人事、管理運営上あまりにも図書館の名に値しないものが多い。」この批判は根底には経費、資料等の不足をついていると思う。これを謙虚に受けとめ、図書館らしい図書館づくりに進まねばならないと切に思われる。

- 1) 台湾における「大学図書館基準」中国図書館学会編 鈴木徳三訳 図書館界19(1) p. 19-24。
- 2) “The Preparation of the Standards for College Libraries. Standards for College Libraries” の訳。中村道岡訳 JLA Information Service. N. S. 2(1) 1961. p. 10-28。
- 3) 2) の Standards for Junior College Libraries の訳。訳者同上 2) の p.19-27。
- 4) Librarg Association Record. 66. P. 272-275 1964。大学図書館の蔵書数 黒木努 図書館学年報14(1) 1968 p. 58で蔵書数についての紹介あり。
- 5) 人件費・資料費等の記載額は「日本の図書館」「大学図書館実態調査結果報告」の数字と異なる。報告が間違っていたためお詫びして訂正する。
- 6) 日本図書館協会編・発行。
- 7) 文部省大学学術局情報図書館課編・発行。
- 8) 図書館予算とその使用、管理について 岡野真琴（関東学院大学）第3次第4回大学図書館研究集会報告書 1973（日本私立大学連盟）p. 71-75。
- 9) 日本の大学図書館に関する諸基準および調査とその問題点（第1回日米大学図書館会議議事録）p. 112-114。
- 10) “Quantitative Criteria for Adequacy of Academic Library Collections” の訳。黒木努訳 現代の図書館4(2) 1966 p. 95-104。
- 11) 図書館学年報14(1) 1963 p. 54-64。
- 12) 奉仕の拡充について—同志社女子大学の統計調査に基づいて— 下村正臣 第3次第4回大学図書館研究集会報告書 p. 62-68。
- 13) 国学院大学図書館 昭和47年度年次報告 p. 40による。
- 14) 蔵書構成の適否をはかる一方法 図書館界23(4) 1971 p. 161-163。
- 15) 市立図書館の蔵書構成 図書館界18(4) 1966 p. 114-121。
- 16) 自館蔵書構成の科学化 永田清一 大学図書館における諸問題（私立大学図書館協会）p. 41-49。
- 17) 同上。
- 18) 大学図書館の蔵書構成と資料選択の原理的考察 藤田喜六 私立大学図書館協会会報 59:1973. 4 p. 132-139。
- 19) 4) と同じ。
- 20) 10) と同じ。

- 21) 10) と同じ。
- 22) 18) と同じ。
- 23) 16) と同じ。
- 24) 図書館の実態を知る数字, これだけは 森耕一 図書館雑誌63(11) p. 5-7。
- 25) 毎日新聞社 読書世論調査 1974年版 p. 45。
- 26) 図書館の話 森耕一 至誠堂 昭和41 p. 322。
- 27) 同上 p. 325。
- 28) 同上。
- 29) 同上 p. 327。
- 30) 私立大学図書館の発展とその障碍 図書館界14(3) 1962 p. 91-94。